

日本語の非典型的他動詞文

——有情物の局部を目的語に持つ他動詞文の一考察

張 志軍

0、始めに

日本語動詞には、自動詞と他動詞の違いがある。一般的には「を」格名詞をとる動詞は他動詞で、とらないのは自動詞である。これは、形の側面から定義したものである。一方、意味の側面から他動詞の他動性を定義するものも少なくない。他動性については、多くの先行研究（ウェスリー・M・ヤコブセン1989）（酒井峰男1990）（角田太作1990）で論じられてきた。多少の違いはあるが、以下の三点にまとめることができる。

- ① 関与している事物（人物）がふたつある。
- ② 動作者の動作は対象に及ぶ。
- ③ 対象に変化を起こす。

しかし、形の上の他動詞が必ずしも意味上の他動詞と一致するとは限らない。実際、日本語の表現には、上にあげた他動性が見られないのに、他動詞のように「を」格名詞を取るものがある。そのため、日本語を学習する外国人は、困惑し、誤用が多い。以下に、外国人が理解しにくい他動詞表現の例を示す。

1. 大学時代の流行通りに私は、髪が肩に垂れたり、あごひげを生やしたりしました。（アメリカの学生）→ 髪を肩まで垂らしたり

2. すぐに相手は、目が大きくなったり，知ったかぶりに笑ったり，
「いい名前ですね」と言ったりしました。（アメリカ学生）

→ 目を大きくしたり

3. この間，涙が流れながら，……などの作品を読みました。（中国の
学生）→ 涙を流しながら

（『日本語誤用例文小辞典』（市川保子）より引用）

上記3例の共通点は，自然的変化・状態を表す自動詞表現が，人的力で
対象を変化させることを表す他動詞表現に直されていることである。

市川（1997）は，誤用の起因を「特に人的力を加えなくても自然に起こ
る現象を他動性の動詞を用いて表すという日本語の特徴がつかみにくい
点」にあるとしている。

そこで，今回，人的力を加えなくても自然に起こる現象を表す他動詞文，
主に有情物の局部を目的語に持つ他動詞文と対応する自動詞文を考察し，
両者の使用上の差異および他動詞文の必要性の究明を試みた。本論では，
普通の自他動詞文と区別するために，自動詞文を「身体名詞自動詞文」，
対応する他動詞文を「非典型的他動詞文」と呼ぶ。使用する例文に出所が
記されていないのは『15万例文・成句現代国語—用例—辞典』からの引用
である。

一、非典型的他動詞文の構成要素

誤用例に出てきた問題箇所は，動詞文にある。自動詞文が不適當だと判
断され，他動詞文に直された。この他動詞文の目的語は対応する自動詞文
の主語である。では，この他動詞文の目的語と他動詞の特徴を見てみよう。

（1）自動詞文の主語であり他動詞文の目的語である主体の局部名詞

誤用例に出てきた「髪」「目」は普通名詞であるが、しかしそれは人間や動物の体の一部分で、主体から切り離しては考えられないものである。「涙」は人間の生理変化によって分泌されるもので、やはり主体についているものである。簡単に言えば、主体の一部である。こういった身体部分と主体の関係について「不可分離所有」「譲渡不可能」と呼び方がいろいろあるが、「全体と部分」の関係には変わりがないのである。

(2) 部分名詞を目的語に持つ他動詞

実際、身体の一部を目的語に持つ他動詞の数は非常に多いが、一概に、そのすべてが非典型的他動詞文を作るものとは言えない。その動詞の違いを見てみよう。

- (a) 頭を {抱える／丸める／ひねる} 顔を {しかめる／あわせる} 目を {つぶる／盗む／奪う} 口を {挟む／利く} 手を {洗う／こまねく} 腰を {かがめる} 足を {組む／運ぶ}

以上にあげたのは身体の局部を目的語に持つ他動詞文である。これらの他動詞は対応する自動詞を持っていない。高橋太郎 (1975) 仁田義雄 (1982) は主体の所属物を対格に持つ他動詞の用法を動詞の再帰用法と見ている。動作主の働きかけは、また動作主自身に戻った点から、自動詞の主体結果と同じ性質を持っていると主張する。一方、天野みどり (1986) が再帰動詞や再帰用法を持つ動詞は他の他動詞或いは他動詞構文と同様に扱ってさしつかえはないと主張する。⁽¹⁾

ともあれ、これらの他動詞は、対象が動作者自身である点を除いて、すべて普通の他動詞と同じである。動作者の対象への働きかけも見られるし、対象に変化も起きる。なにより、この種の他動詞文は対応する自動詞がないため、誤用例のような自動詞文が出ることはないだろう。

- (b) 口をあける (口があく) 手を上げる (手があがる) 頭を下げる (頭が下がる)

(b) の組み合わせは他動詞と自動詞が対応している。これらの他動詞文の特徴を見てみよう。

5. 右と左を見て、車が来ないことを確認してから、手を上げて横断歩道を渡りましょう。

6. 道端に咲く草花に足を止めることがある。

7. 海と山のどちらがよいかと聞いたところ、断然海にたくさんの手が上がりました。

8. 映画館の前で足が止まる。(日中)

自他対応関係によって、5. 6は意志を持った動作の主体の、対象物に及ぼす何らかの変化や影響を表す他動詞文で、7. 8は他から及ぼされる働きかけによって生じる主体自体の変化、または、結果として生じる状態を表す自動詞文である。「手」や「足」が有情物の一部で、その動きは有情物によってコントロールされている。従って7. 8. の「手」「足」はひとりでの「あがる」「止まる」ことが考えられない。つまり、有情物の「手をあげる」「足を止める」という積極的な努力が「手が上がった」「足が止まった」という結果を生んだのである。だから5. 6. の他動詞文は働きかけを表す他動詞文で、7. 8. は働きかけの結果を表す自動詞文である。つまり、5. 6の他動詞文は典型的な他動詞文である。

(c) 顔を赤らめる (顔が赤らむ) 腹を立てる (腹が立つ) 涙を流す
(涙が流れる) ひげを生やす (ひげが生える) 目を覚ます (目が覚める)

(c) グループの他動詞文も対応する自動詞を持っているが、(b) とはどう違っているのだろうか。次の用例を見てみよう。

9. ワインをちょっと口にすることで、ほんのり顔が赤らんだ。

10. 生まれたばかりの赤ちゃんにも多少毛は生えている。

11. 彼女はみんなに婚約を祝福されると、恥ずかしそうに顔を赤らめた。

12. 犯人は、背の高い、ひげを生やした男です。

11. 12の他動詞文に5. 6にあるような他動性が見られない。「顔」「ひげ」は有情物の一部分であるが、その部分に、生理反応を起こし、状態変化が起きることがある。例えば、体の生理変化によって、「顔」の色、「髪」の「長さ」が変わってくる場合がある。それは客観的な原因によるものがほとんどで、有情物の意志によるものでは決してないのである。つまり、その変化は人間の意志でコントロールできるようなものではないからである。9. 10は自然変化・状態が自動詞文で表されているのに対して、11. 12は、同じ自然変化・状態が他動詞文で表されている。11の「顔を赤らめる」と12の「ひげを生やす」は典型的他動詞文と本質的に違っている。これこそ非典型的他動詞文と言えよう。

(d) 胸が躍る（胸を躍らせる） 唇が震える（唇を震わせる）

目が輝く（目を輝かせる）

(d) グループの自動詞は対応する他動詞がない。しかし、日本語文法上、自動詞の使役形が他動詞の代用役として使われる用法がある。⁽²⁾ だから、身体名詞と組み合わせる自動詞の使役形は非典型的他動詞と同じものだと考えてよかろう。

二、非典型的他動詞文の意味用法

非典型的他動詞文は実際どのように使われているのか、二つの部分に分けて考察したい。

(一) 文末に使われる非典型的他動詞文と自動詞使役形

13. 大地震のときおばあさんは驚きのあまり、腰を抜かしてしまったそうだ。

14. チョコレートを差し出すと、むずかっていた子がやっと笑顔を浮かべた。

15. この坂は、かなり急勾配なので、上がりはいつもハアハア息を切らす。
16. 傷口に消毒液をつけると、患者はちょっと顔をゆがめた。
17. おじいさんは、孫が遊びに来ると嬉しそうに、目じりを下げている。
18. 30分以上待たされ、彼女は頭に来て唇をわなわな震わせていた。
19. 舌が長いせいなのか、歯が抜けているせいなのか、男の発音は不明瞭で、一つの単語をしゃべるたびにつばをあちこちに飛ばした。
(朝日8, 14夕刊<8月の果て>)
20. どの顔も焼きすぎた小熊の様な色をしていて、顔、クビ、腕、脚、いたるところから雨に打たれているかのように汗を流している。
(朝日8, 12夕刊<8月の果て>)
21. 少女は華やかな都会への憧れに胸をうずかせた。
22. 私たちの話を聞いたおばあさんは、悲しそうに顔を曇らせました。
上の例文から次の特徴が観察された。

① 第三人称を主語とする文が多い。

例文の多くは、語り手あるいは書き手が見た第三者の様子が描かれている。つまり、語り手は人物に焦点をあてて、いろいろな面から観察し、描いている。

第一人称が現れないのは、自分の身体変化は目で捉えるより感覚で捉えるのが普通だからであろう。誤用例1の場合、第一人称が使えるのは、過去の自分を振り返って、当時の自分の様子を、客観的に描いたので、第三人称と同じような表現ができるのである。

② 主語以外の、状態変化の引き起こし手が明記されているか、暗示されている。

この特徴は、非典型的他動詞文の性質、つまり主語が動作者ではないことが裏付けられる。

例13の「腰を抜かす」は生理変化で、主語の意志によるものではなく、

災害に遭ったときの精神状態による生理反応である。例14の「笑顔を浮かべる」は子供の感情変化を表しているが、その原因は「チョコレートを差し出す」ところにある。例15の主語は文面に表れないが、語り手と考えていい。(動詞を述部の中核用言とする叙述構文において動作主や状態主が明示されない場合は動作主や状態主は語り手または書き手である)「息を切らす」は外部環境による生理変化であるが、現時点の変化ではなく、過去から重ねた経験である。例16の「顔をゆがめる」は薬の刺激による感覚変化の表出である。例17の「目じりを下げる」は喜ぶ表情である。例18の「唇を震わせる」は強い心の動揺の現れである。例19の「つばを飛ばす」という異常な話し振りの原因に「歯が抜けているせいか」と生理欠陥を上げている。例20の「汗を流す」は人間の生理現象を表しているが、原因は明示されていないが、文脈からその原因が読み取れる。21の自動詞使役形の「胸をうずかせる」は「憧れ」の気持ちによるもので、22の「顔を曇らせる」は「話の」内容が誘因である。

しかし変化ではなくただの状態を表す場合、非典型他動詞が使われても、原因を表す部分が見当たらない。例えば「久しぶりに会った叔父は、ひげを伸ばしていた。」「あの高校生は髪をぼーぼーと伸ばしている。」

(二) 複文の従属節に使われる非典型的他動詞文と自動詞使役形

23. 決勝で敗れたチームは、涙を流しながら、来年こそはと誓うのだった。
24. 熱戦を繰り広げられる中、僕たちは声を枯らして応援した。
25. 授業中、隣の子がよだれを垂らして、居眠りをしています。
26. おじさんは何やら意味ありげな笑いを浮かべて、僕のほうを見た。
27. 子供の頃、腹を減らして家へ帰ると、暖かいご飯が待っていたものです。
28. 冷たい北風の中で、弟たちは頬を赤くして遊びまわっている。

29. 病人は両手で胸を押さえ、額には脂汗を浮かべて苦しがっていた。
30. プールに上がった選手たちは唇を真っ青にしてぶるぶる震えた。
31. 若者が、額からぼたぼた汗を流して、連日炎天下の草刈を続けている。(日英)
32. 父は、その日一日、足を棒にして仕事を探し回った。
33. 夫は何時もの薄笑ひを浮かべながら、彼女が妹の口真似をするのを、面白さうに聞いてゐた。(芥川龍之介・秋)
34. クリスマスが近づくと胸をときめかせてサンタクロースを待った幼い日が胸によみがえる。
35. 殊に照子は活き活きと、血の色を頬に透かせながら、今でも飼つてゐる鶏の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。(芥川龍之介・秋)

例23～35の非典型他動詞文や自動詞使役形は複文の従属節として使われている。これらの文には次の特徴が見られる。

① 非典型他動詞文は「て」形接続によって、主節の文と修飾関係や継起関係を作っている。

普通「て」形動詞は複文の中で主節の動詞と「継起関係」「因果関係」「修飾関係」を結んでいる。「継起関係」というのは二つの出来事の間には時間的な関係、つまり先行後行の関係である。「因果関係」は、原因と結果の関係である。「修飾関係」というのは従属節が副詞的な存在で、主節を修飾している。上の例文に現れた非典型的他動詞文が、主節と修飾関係を結んでいるのがほとんどである。

従属節に使われる普通の他動詞文が、主節の修飾成分として、行為を実現させるための手段を表すのが多い。例えば「次の言葉を使って文を作りましょう」「人や車は信号に従って通ります」のような使い方である。それに対して、非典型的他動詞文は、主節の行為が行われるときの状態を表している。

修飾関係に使われる非典型的他動詞の多くは、瞬間動詞で、変化後の状態が持続しているのを表す。しかし、その中に、変化を起しても状態として残らないものもある。この種の非典型的他動詞文は主節動詞文と継起関係を結んでいる。例えば

36. 太郎は足を滑らせて、転んだ。

37. 早朝のランニング中に、鉢巻姿の白髪老人が急にぎくっとひざを折り、そのまま倒れた。(日英)

「足を滑らせる」と「ひざを折る」は、主語自身にも予知できない動作である。前者は環境や自分の不注意によるもので、後者は体の内部の異変によるものである。

② 非典型的他動詞文の「ながら」形は、継続状態を表す場合と結果持続の強調を表す場合がある。

「声がかれている」は変化の結果の持続、「涙が流れている」「唇が震えている」はいま継続している状態を表す。前者は瞬間動詞、後者は継続動詞が使われている。両者の違いはその対応する非典型的他動詞文にも見られる。従属節に使われる場合、前者は「て」形接続で、変化後の状態を表し、後者は「ながら」形接続で、その時点の継続している状態を表す。

「ながら」は普通、他動詞と能動詞にしか接続できない副助詞である。その意味は「二つの動作や作用が平行する動作の同時性“同時進行”」と「反復行為」(森田1980)それから「積極的な努力による変化の結果の維持」(益岡隆志2000)である。

他動詞の形を借りて、変化や状態を表す非典型的他動詞文の「ながら」形は継続動詞に続くと、意志性のある継続的動作ではなく、意志性のない継続的(動的)状態を表す。例えば23の「決勝で敗れたチームは、涙を流しながら、来年こそはと誓うのだった」がそうである。

一方、「ながら」形が瞬間動詞と結びつくと、変化後のある状態がずっと長く続いていることが強調される。例えば33の「夫は何時もの薄笑ひを

浮かべながら、彼女が妹の口真似をするのを、面白さうに聞いてゐた」が
そうである。この用法は他動詞の「積極的な努力による変化の結果の維持」
にあたるもので、積極的に維持するのではないが、人にそう感じさせるほ
ど長く続いていることを表している。同じ動詞で「て」形接続も見られる。

③ 従属節の非典型他動詞文は主節の動詞文と同じ主語をもつ。

この点は従属節が主節と「修飾関係」や「継起関係」を結ぶ前提条件で
もある。カトリーヌ・ガルニエは『日本語の複文構造』（1994）で「継起
関係」を「時間的従属」と呼び「修飾関係」を「て形特有の用法」と呼ん
でいる。この二種の複文の共通する特徴は従属節と主節は同一の主語を持
つ点である。

④ 主語以外の状態変化を引き起こす原因らしきものが示されていない。

非典型的他動詞文は文末に使われる場合、文の中心動詞として、変化・
状態を表している。従って、変化の起こし手も言及される。しかし、複文
の従属節に使われる場合、変化後の状態あるいは、その時点の継続状態を
表しているが、それは主節文を修飾する副詞的な存在にすぎないので、変
化の原因を言及する必要はないのである。文中に原因を表す部分があつて
も、それは主節動詞が現す主語の行動の原因であり、非典型的他動詞が表
す状態変化の原因ではない。これは、文末に使われる非典型的他動詞文と
の大きな違いである。

⑤ 非典型的他動詞と同じ主語を持つ主節文の動詞は他動詞でも自動詞
でもいい。

「て」形や「ながら」形接続の従属節に続く主節の動詞はどんな性質の
ものかを調べたところ、他動詞はもちろん、自動詞もあることが分かった。
自動詞の中で、意志性のあるもの「応援する」「帰る」「遊びまわる」とな
いもの「震える」「苦しがる」に分かれるが、他動詞の中で、「居眠りをす
る」という意志性の感じさせないものもあるが、ここの「する」は機能動
詞で、⁽³⁾ 名詞を動詞化する役割しか働いていないので、「居眠りをする」

を自動詞だと考えたほうがよからう。

三、対応する自動詞文の意味用法

本来他動詞文と自動詞文は、主語の働きかけの有無で区別されるのであるが、二に挙げた例文は、主語自身の一部におのずから生まれた生理変化が、いかにも主語の意志で変化させたように他動詞で表現されている。そこで同時に存在する自動詞文と非典型的他動詞文の使い分けをはっきりさせるために、非典型的他動詞文と対応する身体名詞自動詞文の意味、用法を調べてみた。

(一) 文末に使われる身体名詞自動詞文

39. 年のせいか、階段を六階まで上がると息が切れます。
40. 僕は母に反抗したとき、母の顔が悲しそうに、ゆがんだ。
41. 重い荷物をかついだ少年の額には、みるみる汗が流れ出した。
42. 慣れない山道を一日中歩き回って、足が棒になってしまったよ。
43. 明日の誕生日には、どんなプレゼントがもらえるか、いまから期待に胸がときめく。
44. まだ11時なの？ああ、おなかがすいた。
45. 問い詰められた容疑者の額に脂汗がにじんできた。
46. 子供の話を聞いていた母の口元に、優しい微笑が浮かびました。
47. 昔の過ちを思い出すたび、いまでも心がうずく。
48. 大声を出して見方チームの応援をしたので、すっかり声が枯れてしまった。
49. 女の子に話しかけられると、いつも顔が火照ってしまう。
50. 弟は中学に入ると、急に背が伸びた。

上記の自動詞文に使われる自動詞は、二で挙げた非典型的他動詞文の他

動詞と対応している。その特徴といえば、

① 文面から状態変化の引き起こし手が読み取れる。

自動詞としては当然であるが、「非典型的他動詞文」も同じ特徴を持つことは、「身体名詞自動詞文」が「非典型的他動詞文」の基になっていることを意味する。

② 自動詞文の主語の所有者は第一人称が多い。

身体名詞が普通の名詞と違って主格の座に置かれても、その所有者が明示あるいは暗示されなければならない。なぜかという、身体名詞はあくまでも有情物に付着して始めて存在するものだからである。

他動詞文の身体名詞の所有者はほとんど主格「が」で現れている。しかも第三人称が圧倒的に多いのに対して、自動詞文の身体名詞の所有者は属格「の」で現れるか、二重主語の「が」で現れるのである。第三人称のほとんどが「の」格である。注目すべきところは例文の半分以上は、所有者が文面に現れていないことである。これは、文脈上の指示がなければ、第一人称、つまり語り手と考えてよかろう。つまり、身体名詞自動詞文は主に話者が自身の変化を表す表現である。

自動詞文は主に第一人称の身体変化、他動詞文は第三人称の身体変化を表している。前者は内面からその変化を捉えているのにたいして、後者は外面からその変化を捉えている。絶対ではないが、両者の使い分けにある程度の目安になるだろう。

倉持保男（1986）は、「腹が立つ」と「腹を立てる」の表現上の違いを「主体の心内に生じる感情の変化そのものを表す。」と「主体の心内に生じる感情の変化が基になって、表情・態度・言動などに投影された何らかの変化を、その起因となる感情変化を一体化させて、動的な変化として表す」とあげた。

(二) 複文の中の身体名詞自動詞文

51. 朝食を食べてこなかったので、お腹がすいて、お昼が待ち遠しい。
 52. 一年中、水仕事をする女性たちは、冬になると、手にひびが切れて痛そうだった。
 53. 扁桃腺が腫れて、痛くてたまらない。
 54. 最近腹がゆるんで、ぶよぶよだ。(日英)
 55. 明日のデートのことを思うと、胸が躍ってじっとしてられない。
 56. 濡れた路上で足が滑って、ずどんと尻餅をついた。(日英)
- 上の例を見る限り、次の特徴が観察された。

① 従属節と主節の主語は同じものではない。

従属節の主語は身体名詞で、主節の主語は有情物である。主節の主語が第一人称の場合、文面に表れないのが多い。第三人称の場合、従属節の前に現れることが多い。二者の関係は「継起関係」でも「修飾関係」でもなく、「因果関係」である。

例えば「お腹がすく」と「お昼が待ち遠しい」；「手にひびが切れる」と「痛そう」；「扁桃腺が腫れる」と「痛くてたまらない」；「腹がゆるむ」と「ぶよぶよだ」；「胸が躍る」と「じっとしてられない」；「足が滑る」と「尻餅をつく」はそれぞれ原因文と結果文である。

② 主節文の述語に使われる用言は、形容詞、形容動詞と自動詞である。

身体名詞自動詞文の主節に形容詞が多く使われる。しかも感情、感覚を表す形容詞が多い。日本語のこの種の形容詞は第一人称主語を要求する。感情形容詞が使われると主語が自然と第一人称になる。形容詞に伝聞助動詞や様態助動詞など陳述的な要素をつけ加えて始めて、第二、三人称の感情、感覚を表すことができるのである。52がそうである。

主節の用言は自動詞が使われる場合、意志性のないものに限る。「尻餅をつく」は他動詞の形を取っているが、非典型的他動詞と同じく他動性のない他動詞である。

身体名詞自動詞文と非典型的他動詞文の意味用法上の違いを整理してみると次のようなことが分った：

- (Ⅰ) 文末に使われる身体名詞自動詞文と非典型的他動詞文はいずれも状態変化を表すが、前者は第一人称が感じた変化を表すのに多く使われ、後者は第三人称に現れた変化を表すのに多く使われる。
- (Ⅱ) 従属節の身体名詞自動詞文は主節と因果関係を作っているのので、主節用言と違う主語を持っているのに対して、従属節の非典型的他動詞文は主節と修飾関係や継起関係を作っているのので、主節動詞と同一の主語を持つ。
- (Ⅲ) 身体名詞自動詞文を従属節に持つ主節用言は有情物の感情や感覚、変化の結果を表しているが、非典型的他動詞文を従属節に持つ主節用言は有情物の動作、行為、様態を表している。

四、非典型的他動詞文の必要性

これまでの考察で、非典型的他動詞文と対応する身体名詞自動詞文の意味用法および両者の異同が明らかになった。

では、なぜ自然変化・状態を表す自動詞文があるのに、誤解を招きやすい他動詞文を必要とするのかを考えてみよう。

(一) 文末に使われる非典型的他動詞文の必要性

文末に使われる身体名詞自動詞文と非典型的他動詞文の違いは、有情物を主語とする場合、身体名詞自動詞文が有情物と身体名詞がともに主格「が」をとる。つまり二重主語文「XはYがZ」になる。これは「総主文」とも呼ばれている。⁽⁴⁾ 非典型的他動詞文は有情物を主格「が」、身体名詞を対格「を」をとる。つまり普通の他動詞文「XはYをZ」になる。

身体名詞を主語とする場合、身体名詞の所有者が明示される属格自動詞

文「XのYはZ」と所有者が明示されない身体名詞自動詞文「YがZ」に分かれる。

では、なぜ「XのYはZ」「XはYがZ」といった二通りの自動詞文があるのに「XはYをZ」という他動詞文が必要になるのであろうか。この問題について奥津敬一郎(1983)は視点の角度から次のように論じられた。

- a. おじいちゃんの足が折れた。
- b. おじいちゃんは足が折れた。
- c. おじいちゃんは足を折った。

aは「足」に視点を置いた文だが、bとcは所有者の「おじいちゃん」に視点を置いてP-Floatしたものである。しかし、bは二重主語文で、「足」もやはり主語だから、いわば視点が分かれて弱くなった感じである。「折れる」に対応する他動詞の「折る」があるのだから、これを利用して「足」を主語から目的語に移せば、視点は完全に所有者の「おじいちゃん」に向けられる。これがcである。

奥津の視点説によれば、bの二重主語文は焦点が一つに絞れず、その代わりにcの他動詞文は焦点がはっきりしているので、他動詞文の形が望ましいのである。

確かに、集めた例文から見ると、総主文の例が非常に少ないのである。即ち、総主文の主題が第三人称の場合、身体名詞自動詞文が非典型的他動詞文に取って代わられる傾向がある。総主文の主題が第一人称の場合、主題が省略される「無題文」の形で現れる。

ここで言えることは有情物を中心に描くために総主文より非典型的他動詞文のほうが適当である。しかし、総主文が使えないことではない。

では、「XのYがZ」型自動詞文(属格自動詞文)はどのような限界性を持っているのであろうか。

人間は常に何かの影響を受けて感情的・身体的な変化を起している。その変化は表情・態度・言動に投影されるのである。それが言語化されるときに、スポットを当てる場所によって構文が違ってくる。

属格自動詞文の表現の中心は人間より変化を起こす身体部分である。40「僕は母に反抗したとき、母の顔が悲しそうに、ゆがんだ」がそうである。41、45、46にも身体名詞の所有者が現れているが、身体名詞の属格ではなく、状態変化の場所の属格になっている。いずれにせよ、この種の自動詞文は静的な空間のある状態を表している。存在を表す表現と同じ性質を持っている。

人物の身体変化の過程を動的に表現しようとするとき、属格自動詞文が適えなくなるのである。例14、16、17のように、人物の変化は前文に現れる要素によって起きた場合、その環境的、心理的な影響を受けたのは有情物であり、身体名詞ではない。属格自動詞文を使うと、前文の動作の対象が身体名詞になってしまうのである。

このように、変化を引き起こす原因となる人の言葉、動作が人間に向けられる場合、その人間の変化を表すとき、属格自動詞文が使えないのである。

また「腹が立つ」という慣用句の場合、属格自動詞文が使えない。「彼の腹が立っている」は非文法的である。

つまり人間を中心に動的に表現しようとする場合、他動詞構文が一番適当である。

(二) 複文の従属節に使われる非典型的他動詞の必要性

複文の従属節に非典型的他動詞文が使われることは、身体名詞自動詞文が使えないからである。

では、身体名詞自動詞文は、本当に主節の修飾成分になれないのか。

井上和子の『変形文法と日本語（下）』（1976）の中で「遺族は怒りに唇を震わせながら、次のように言った」の主語「遺族」が動作主格ではなく、経験者格だと述べ、上記の他動詞文とある程度対応している自動詞文として、「遺族の唇が怒りに震えていた、そして彼らは次のように言った」を挙げた。

見れば分かるようにこの例の自他対応はかなりずれている。「遺族は怒りに唇を震わせながら次のように言った」という他動詞文はひとつの複文になっているのに対して、対応する自動詞文は「遺族の唇が怒りに震えていた、そして彼らは次のように言った」のように、二つの文に分かれた。ということは身体名詞自動詞文「唇が怒りに震えている」が「次のように言った」という他動詞文の修飾成分になれないのである。

では、問題はいったいどこにあるのであろうか。

市川保子が冒頭の誤用例の問題点を次のように分析した。「並列表現には『て』や『たり』が用いられるが、動作の主体は同一のものであるので、一方が他動詞的表現であれば他方も他動詞表現、逆に一方が自動詞的表現であれば他方も自動詞表現を取ることになる。」

確かに留学生の誤用例1に「髪を肩まで垂らしたり」と並列するもう一つの動詞句「あごひげを生やす」は他動詞文になっているが、それも同じ非典型的他動詞文である。誤用例2に「目を大きくしたり」と並んだ動詞は「笑ったり」「言ったり」である。「笑う」は他動詞用法もあるが、自動詞でもある。例3の「涙を流す」と「作品を読む」は「て」によって結ばれているが、それは並列関係ではなく、修飾関係である。

本稿の考察で立証したことであるが、複文の中で、自動詞と他動詞は共存できるのである。27の「腹を減らして帰る」28の「頬を赤くして遊びまわっている」30の「唇を真っ青にしてぶるぶる震える」はみんな「他動詞形＋自動詞形」である。逆に「立ってご飯を食べる」「黙ってみんなの話を聞く」のような「自動詞形＋他動詞形」の文も成立する。

日本語の自動詞文も他動詞文も動詞はそれぞれの主語にしかかからない。もし自他動詞が共通の主語が持てたら、自動詞文と他動詞文は一つの文に共存することができるのである。

要するに、問題は身体名詞自動詞文の身体名詞が「主格」になっているため、ほかの動詞と並列関係、継起関係および修飾関係がつかれないのである。これらの関係を作る前提条件は同じ主語を持つことである。一つにまとまる唯一の方法は、自動詞文の主語を他動詞文のそれと同じものにすることである。

「遺族は怒りに唇を震わせながら次のように言った」は一つにまとまった文である。自動詞文の主語「唇」を他動詞文の主語「遺族」の目的語に降格し、自動詞も他動詞の代用と言われる自動詞の使役形に変え、「て」接続によってもう一つの他動詞と修飾関係を作ることができた。

「シテ」形接続の前後動詞について、久野暉（1973）が「『V1, V2 共に、意志でコントロールできる動作・状態を表すか、V1, V2 共に、意志でコントロールできない動作・状態を表していなければならない』という制約がある。」と指摘した。その非文法の例として「太郎は朝目を覚まして、顔を洗った」を挙げた。

上記の規則はある前提条件が必要である。つまり前後文の関係は「継起関係」の場合に限られるのである。非典型的他動詞文が「シテ」形で現れるとき多くの場合、後続文と「修飾関係」を結んでいる。「修飾関係」にあるV1とV2は久野の言う制約を受けないのである。実際考察で分かったように、非典型的他動詞文（意思でコントロールできないもの）と並んで使われる動詞は、むしろ意志でコントロールできる他動詞や能動詞のほうが多いのである。

もちろん、後続文と「継起関係」を作る非典型的他動詞文もある。例36、37がそうである。この場合、久野の「前後動詞が同じタイプのものでなければならない」という制約を受ける。次の例文、一見久野が非文法的と指

摘した文と同じ構造をしているが、よく見るとやはり違うのである。

「明け方目を覚ましてみると、思いがけない吹雪だった」(堀辰雄「信濃路」)

ここの「見る」は意識的に見るのではなく、「無意識に外へ目をやる」という意味で、「目を覚ます」と同じタイプのものと言えるのである。

これで、複文の従属節に非典型的他動詞文を必要とするのは、後続する他動詞との形態上の統一からの要求でもなく、主節の動詞の意味構造からの要求でもないことが分かった。

カトリヌ・ガルニエ(1994)は『日本語の複文構造』の中で「て」形の用法を①「て」形に特有の用法 ②時間的従属 ③論理的従属 ④独立、と大きく四つに分けた。①の使用上の制限について「終止的連続体に補足成分に関する制限はない。」「『て』形の連続体において補足成分の制限がある。『が』の補足成分が見当たらない。」と指摘した。⁽⁵⁾

「ながら」形接続にも「たり」形接続にも「て」形接続と同じ「制限」が指摘された。

つまり、日本語の複文構造には、従属節に主節の主語と違う「が」格文が入らない規制があるのである。

これまでの考察や分析によって、次の結論が得られた。非典型的他動詞文の形を必要とするのは統語構造からの要求である。つまり、日本語の複文の統語構造には、客体主語を持つ自動詞の従属節が存在しないのである。

五、終わりに

以上、本稿では「非典型的他動詞文」の意味用法、身体名詞自動詞文との差異および使う必要性について、考察してみた。従来の研究では、この種他動詞は、焦点が一つに絞れない総主文の代用とされた。また、同じ

主語を持つ動詞の間には形をそろえる必要からの選択とされた。本稿では、先行研究を踏まえた上で、総主文以外の属格自動詞文の不足を分析し、「非典型的他動詞文」は有情物中心表現の最適な形であることを示した。また、身体名詞自動詞文が他動詞文と一つの文に共存できないのは動詞の形の違いによるものではなく、その他動詞文と違う主語を持っていることによるものだと突き止めた。さらに、非典型的他動詞文の形は日本語の複文の統語構造に要求されたものであることを明らかにした。

今回考察の対象は人間の身体部分に絞ることにしたが、調べる中で、人間以外の動物や生物、抽象的物事を主語とする自動詞文にも対応する非典型的他動詞文が使えることが判った。同時に、非典型的他動詞文に変えられない身体名詞自動詞文の存在にも気づいた。その原因の究明を今後の課題としたい。

注

- (1) 天野みどり「日本語文における＜再帰性＞について——構文論的概念としての有効性の再検討——」に仁田、高橋が主張の根拠とする三点—①再帰構文はまともな受動文が対応しない②ヲ格成分と動詞とが組み合わさった意味を表す自動詞に対応する。③対応する自動詞がなく、対応する使役—他動性他動詞がある—に反例を持って異議を唱えた。
- (2) 村木新次郎(1991)が「彼女は顔をほころばせた」の自動詞の使役形を「再帰的な使われ方」としている。
- (3) 村木新次郎の『日本語動詞の諸相』(1991)で、「実質的な意味を名詞にあずけて、自らはもっぱら文法的な機能を果たす動詞」を「機能動詞」と呼んでいる。
- (4) 益岡隆男の『命題の文法』(1987)に『ハ』を伴う名詞句(『主題(名詞句)』)と『ガ』を伴う名詞句(『ガ(名詞句)』)が単一の述語と結ぶ文、すなわち、「XハYガ～述語」という形式の文を「総主文」と規定した。
- (5) カトリーヌ・ガルニエの「連続体」は一般に言う「句」あるいは「節」にあたるもの。

「終止的連続体」は文を終了する形「～動詞語尾」「動詞＋接尾辞や助動詞

語尾」

「補足成分」は修飾成分のことである。

【参考文献】

- ウェスリー・M・ヤコブセン (1989) 「他動性とプロタイプ論」
『日本語学の新展開』くろしお出版
- 酒井 峰男 (1990) 「他動性による動詞の分類」
『日本語教育論集』名古屋大学日本語学科
- 角田 太作 (1990) 『世界の言語と日本語』くろしお出版
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 久野 暲 (1973) 『日本文法研究』大修館
- 井上 和子 (1976) 『変形文法と日本語』(上下), 大修館
- 益岡 隆志 (1987) 『命題の文法—日本語文法序説』くろしお出版
——— (2000) 『日本文法の諸相』くろしお出版
- 仁田 義雄 (1982) 「再帰動詞、再帰用法—Lexico-syntaxの姿勢から」
『日本語教育』47
- 天野みどり (1986) 「日本語文における<再帰性>について」
『日本語と日本文学』筑波大学国語国文学会
——— (2002) 『文の理解と意味の創造』笠間書院
- 高橋 太郎 (1975) 「文中に現れる所属関係の種々相」『国語学』103
- 市川 保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』凡人社
- 奥津敬一郎 (1983) 「不可分離所有と所有者移動—視点の立場から」
『都大論究』20
- カトリーヌ・ガルニエ著 細川英雄・小出美河子訳 (1994)
『日本語の複文構造』ひつじ書房
- 倉持 保男 (1986) 「『腹が立つ』と『腹を立てる』」
『国語研究論集 松村明教授古希記念』明治書院
- 林 史典・岡 昭夫編 (1992) 『15万例文・成句現代国語—用例—辞典』教育社
- 尾野秀一編著 (1984) 『日英擬音・擬態語活用辞典』北星堂書店
- 森田 良行 (1980) 『基礎日本語』2 角川書店